

独自開発のウイルス医薬  
鹿大病院 膀胱がんで治験

鹿兒島大学病院は30  
日、がん治療薬として  
独自に開発を進めてい  
る腫瘍溶解性ウィルス

「サバイビン反応性m  
—CRA—1」を用い  
た膝がんの医師主導治  
験を開始したと発表し

た。2年間で24人を対象に、安全性と有効性を評価して実用化を目指す。



会見する鹿児島大学病院消化器内科の井戸章雄教授（右から2人目）ら。30日、鹿児島市の鹿大病院

治験は同病院の井戸  
章雄教授(60) 消化器  
内科、橋元慎一副部長  
(45) 光学医療診療部  
Ⅱらを中心に、22  
日に始まり、切除でき  
ず化学療法の効果が見  
られなかった患者が対  
象。有効性や安全性が  
確認されれば製薬企業  
などと連携し、実用化  
へ向けて多数の患者が  
参加する治験に移る。

脾がんは切除不能の  
ケースが多く化学療法  
の選択肢も少ない。5

年生存率は10%と他の  
がんに比べて低い。井  
戸教授は「難治性ががん

で苦しむ患者の希望になれたら。治験が成功するよう力を尽くしたい」と話した。

「サバイビン反応性 m-CRA-1」は、鹿児島大学大学院の小賤健一郎教授(57)が遺伝子治療・再生医学分野Ⅱが独自開発した遺伝子組み換えウイルス医薬で、がん細胞のみを破壊する。正常な細胞には機能しないため副作用が少ないとされる。小賤教授によると、悪性骨肉腫への安全性を確認する医師主導治療が2016年8月から行われており、良好な成績を取っていると

鹿大病院消化器内科  
11099 (275) 5  
326。(中元聡史)